HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アイヌ語の接頭辞度
Author(s)	中川, 裕
Description	北大文学研究科北方研究教育センター公開シンポジウム「サハリンの言語世界」. 平成20年9月6日. 札幌市
Relation	津曲敏郎編 = Toshiro Tsumagari ed.
Citation	サハリンの言語世界 : 北大文学研究科公開シンポジウム報告書, 63-70
Issue Date	2009-03-08
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/38300
Type	conference paper
File Information	07nakagawa.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

アイヌ語の接頭辞度

中 川　裕
（千葉大学）

１．Dryer による接頭辞性・接尾辞性の計算

Haspelmath et al. eds. 2005. *The World Atlas of Language Structures* は、世界の言語の様々な音韻・形態・文法的特徴について類型論的な分類を行い、その分布を地図上に図示したものである。その Map 26 “Prefixing versus Suffixing in Inflectional Morphology”において、Matthew Dryer は彼が inflectional affixes と呼ぶもののうち､次の 10 個の affix type について、それらが prefix として実現するか suffix として実現するかの検討を行った[1]。

表１：Dryer の取り上げた inflectional affix types

(i)	case affixes on nouns
(ii)	pronominal subject affixes on verbs
(iii)	tense-aspect affixes on verbs
(iv)	plural affixes on nouns
(v)	pronominal posessive affixes on nouns
(vi)	definite or indefinite affixes on nouns
(vii)	pronominal object affixes on verbs
(viii)	negative affixes on verbs
(ix)	interrogative affixes on verbs
(x)	adverbial subordinator affixes on verbs

そして affix として実現するものに与えたポイントを合計し、その affixing index（affix として実現するもの全体の合計）に対する prefixing index（prefix の合計）および suffixing index（suffix の合計）の割合から、諸言語を次の 6 段階のレベルに分けて、地図上にその分布を示した。ここでは prefixing index／affix index の値を便宜上「接頭辞度」（degree of prefixing : 以下、DP）と呼ぶことにし、それを指標として Dryer の区分を示すことにする。

表２：Map26[2]の記号区分とその規準

1	Little or no inflectional morphology	affix index≦2
2	Predominantly suffixing	DP＜20%
3	Moderate preference for suffixing	20%≦DP＜40%
4	Approximately equal amounts of suffixing and prefixing	40%≦DP≦60%
5	Moderate preference for prefixing	60%＜DP≦80%
6	Predominantly prefixing	80%＜DP

この６レベルの区分は地図上ではっきりとした地理的な分布を見せており、言語類型地理論的に意味を持つ指標となっていることが十分に見て取れる。特にユーラシア大陸の北

[1] 以下、Map とある場合は、Haspelmath et al.（2005）中のものを指す。
[2] 図については、http://wals.info/を参照のこと。

部は東西の区別なく、suffix 優勢の言語がほとんど全域を占めており、南部の prefix 優勢な言語と明確な対照をなしている。その中において特異点となっているのが、アイヌ語とケット語である。アイヌ語は Dryer の分類では 4 に、ケット語は 5 に分類されているが、ここではアイヌ語について、Dryer 自身の示した基準に従い、この値が妥当であるかどうかについて検討した上で、その意味する問題を考えてみることにする。

なお同書では、(i)〜(x)の type のうち、(i)〜(iii)については”sufficiently important”だと考えられるため、他の type の 2 倍の点を与えるとしている。また、ある affix type について、prefix と suffix のどちらも dominant であると見なせない場合には、双方に半分づつの点を与えるとしている。こうした重みづけが妥当なものであるか否かは、この手の計算を行なう場合に常に問題になるところであるが、ここではそのことには触れないことにして、この規準に従って計算していくことにする。

２．アイヌ語の接頭辞度に関する評価

アイヌ語について、どの affix type の存在を認めるかについては、いくつかの異なる判断基準を立てることができ、その評価法の違いによって DP の値が変わってくる。

(i) case affixes on nouns：これについては、Map51 で Dryer 自身が分析しており、アイヌ語と日本語についてはともに “No case affixes or adpositional clitics”という範疇に分類している。アイヌ語はいわゆる文法格（主語、目的語を示す格）に case marker として具現化するものは存在しない。その他の格については、*ani*「〜で」、*kari*「〜を（通って）」、*tura*「〜とともに」などの「格助詞」で表示されるが、そのほとんどが語源としての動詞の形と意味を強く残しており、自立性も日本語の格助詞より高い。また自立性の最も低い場所格助詞（*ta*「〜で」、*un*「〜へ」、*wa*「〜から」など）は、原則として普通名詞には直接接合することがなく、位置名詞を head とした名詞句に接合する（地名など一部の名詞を除く）。さらに、格関係を動詞の充当接頭辞を用いて表示する場合もあるといった点から、日本語以上に、格が名詞の接尾辞によって表示されているという解釈は困難であり、これについては問題なく prefix, suffix ともに 0 とカウントしてよいであろう。

(ii) pronominal subject affixes on verbs : アイヌ語のすべての方言において、suffix として実現する主格人称接辞は*-as* と*-an* の 2 種類であり、それ以外（*ku-, e-, ci-, eci-, a-*など）はすべて prefix である。したがって dominant なのは prefix のほうであり、prefix=2 となる。ただし、後述のように Dryer は両者が同格であると考えているようである。その場合は prefix=1, suffix=1 となる。

(iii) tense-aspect affixes on verbs：これはアイヌ語には存在しないので、両者 0。

(iv) plural affixes on nouns : plural affix は動詞には存在するが、名詞には無いとみなしてよいので、両者 0。しかし、Dryer は Map33 “Coding of Nominal Plurality”で、アイヌ語を plural suffix を持つ言語にカウントし、日本語を no plural としている。彼が典拠としていると思

われる Shibatani(1990:32)では、アイヌ語について “there is no grammatical category of number for full nouns”としているが、それに続けて、“However, a suffix *-utar* can be added to indicate plurality as in *aynu-utar* ‘men’ and *cip-utar* ‘ships’” としている。これが根拠かもしれない。しかし、アイヌ語の *utar*「～たち」を plural suffix とするならば、日本語のタチも同じようにカウントすべきであるし、両者を比較した場合、自立度はアイヌ語の *utar* のほうが高いのであり、少なくとも inflectional affix としてカウントすべきものではない。

なお、北大シンポジウムでの発表時に、村崎恭子氏より、樺太方言では名詞に複数接尾辞*-hcin* があることを考慮すべきであるというご指摘をいただいた。しかし、村崎氏自身の記述によれば、これは「複数と言っても西洋語のように２以上は必ず複数というのではなく主観的な複数の概念である。多数の時は必ず*-hcin* をつける」（村崎 1979：85）ということで、やはり inflectional affix というより、日本語の「たち」と同じく意味的に付加されると考えるべきものである。しかもこれは「所属複数接尾辞」というものにあたり、名詞の所属形―すなわち所有表現におかれた名詞にのみ接合するということで、「多数」を意味する場合でも、さらに適用の範囲がせばめられている。

ただ、このような接尾辞形式が一番北方に位置する樺太方言で発達しているということは、３で述べる結論と何らかの関連性を持つ現象かもしれない。後述の DP の計算では、いちおうこの接辞についても考慮した試算を行う。

(v) pronominal posessive affixes on nouns : 所有格の人称接辞のみをカウントすれば、prefix=1 となる。一方、所属形の語尾も posessive affixes の一部だと見なすのであれば、prefix=0.5, suffix=0.5 となる。Dryer 自身は、Map57 “Position of Pronominal Posessive Affixes”で、アイヌ語を possesive prefixes の言語としてカウントしている。

(vi) definite or indefinite affixes on nouns：通常の定・不定を表す標識はアイヌ語には無いと考えるのが普通であり、その場合は prefix, suffix とも 0 となるが、所属形の語尾を名詞の定性を表示するもの（より正確に言えば、その所属先の名詞の定性を表すもの）とみなした場合、suffix=1 とカウントする可能性もある。Dryer 自身は、Map37 “Definite Articles”, Map38 “Indefinite Articles” において、アイヌ語をそれらを持つものとは見なしていない。

(vii) pronominal object affixes on verbs：アイヌ語においてはすべて接頭辞として実現するので、prefix=1。

(viii) negative affixes on verbs：Dryer は Map 112 “Negative Morphemes”で、アイヌ語を Negative particle（Negative affix ではなく）に分類しており、これは妥当である。よって prefix, suffix ともに 0。

(ix) interrogative affixes on verbs：Dryer は Map116 “Polar Questions”で、アイヌ語を日本語とともに Question Particle と分類している。疑問終助詞の *ya* が y を脱落させて、直前の動詞と一続きに発音されることも多いということから、接尾辞とみなすことは可能かもしれな

いが、アイヌ語の疑問形式の多様性ということ、特に疑問表現における *ya* の出現率は決して高くないと予想されることからも、これを inflectional affix として考えることは困難であろう。従って、prefix, suffix ともに 0。

(x) adverbial subordinator affixes on verbs：いわゆる *yakun*「～ならば」、*kusu*「～ので」などの接続助詞を、動詞の接尾辞とみなせるかどうかということだが、これらの接続助詞は、日本語以上に自立性が高く、文頭におかれることも多い。また、*hine*「～して」、*wa*「～して」などの比較的自立度の低い接続助詞でも、完全にポーズがおかれ、音調的に文が終結したと感じられる後でも、出現することがあり、動詞の inflectional affix とみなすことは、やはり困難である。Dryer も、Map94 “Order of Adverbial Subordinator and Clause”で、アイヌ語を“Adverbial subordinators which are separate words and which appear at the end of the subordinate clause”に分類している。従って、prefix, suffix ともに 0。

以上をまとめると、(i), (iii), (iv), (viii), (ix), (x)の 6 項目は、prefix, suffix とも 0。(vii)は prefix=1 となる。そして、(ii)(v)(vi)における評価の差によって次の 1～6 の評価法が立てられることになる。

表３：評価法の違いによるポイント一覧

評価法 / affix types	1		2		3		4		5		6	
	prefix	suffix	prefix	suffix	prefix	suffix	prefix	suffix	prefix	suffix	prefix	suffix
(i)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
(ii)	2	0	2	0	2	0	1	1	1	1	1	1
(iii)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
(iv)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
(v)	1	0	0.5	0.5	1	0	1	0	0.5	0.5	1	0
(vi)	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
(vii)	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0
(viii)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
(ix)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
(x)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
total	4	0	3.5	0.5	4	1	3	1	2.5	1.5	3	2

評価法 1：(ii) prefix=2, (v) prefix=1, (vi) prefix & suffix =0：DP は 4/4=100%となり、6. predominantly prefixing となる。
評価法 2：(ii) prefix=2, (v) prefix=0.5, suffix=0.5, (vi) prefix & suffix =0：DP は 3.5/4=88%となり、やはり 6. predominantly prefixing となる。

評価法 3 : (ii) prefix=2, (v) prefix=1, (vi)suffix =1 : DP は 4/5=80%となり、5. moderate preference for prefixing となる。

評価法 4：(ii) prefix=1, suffix=1, (v) prefix=1, (vi) prefix & suffix =0：DP は 3/4=75%となり、5. moderate preference for prefixing となる。

評価法 5 : (ii) prefix=1, suffix=1, (v) prefix=0.5, suffix=0.5, (vi) prefix & suffix =0 : DP は 2.5/4=62.5%となり、5. moderate preference for prefixing となる。

評価法 6：(ii) prefix=1, suffix=1, (v) prefix=1, (vi)suffix =1：DP は 3/5=60%となり、Dryer の評価と同じ 4. approximately equal amounts of suffixing and prefixing となる。

結論として、アイヌ語は Dryer の規準に従う限り、彼自身の評価結果よりも、より prefix 優勢な言語として位置づけられるべきであることがわかる。諸項目における Dryer の評価を見る限り、(i) prefix & suffix =0, (iv) suffix=1, (v) prefix=1, (vi) prefix & suffix =0 となるので、本稿の評価法１～３のように(ii)と(vii)をそれぞれ prefix=2, prefix=1 と考えるのならば、prefix index = 4, suffix index =1, affix index =5 ということになり、DP は 4／5=80%で、5. moderate preference for prefixing ということになるはずである。

ではなぜ Dryer がアイヌ語を 4 としたかを推測すると、(ii)の pronominal subject affix on verbs に prefix と suffix の双方があることから prefix=1, suffix=1 とカウントし、DP=3／5=60%と計算したということになる。すなわち(iv) suffix=1 とした上で、後の項目についてはここでの評価法 4 に従った値ということになる。前述のように、(iv)を suffix=1 とするのは、少なくとも北海道方言の実態には即していないが、仮に樺太方言の-hcin をこれにあたるものとして、(iv) suffix=1 で全部を計算しなおすと、それぞれの DP は、評価法 1＝80%（5）、評価法 2＝70%（5）、評価法 3＝66.7%（5）、評価法 4＝60%（4）、評価法 5＝50%（4）、評価法 6＝50%（4）ということになる。すなわち、アイヌ語の評価はどんなに低く見積もっても 4 であり、DP=0%(2)という評価しか認め難い日本語をはじめとする周辺の諸言語とは異なった様相を示すということが、やはり確実に言えるということになる。

３．DP と語順の関係

ここで、Map26 を Map81 “Order of Subject, Object, abd Verb”と対比してみると、両者の分布の類似性が見てとれるだろう。すなわち、DP の高い地域は、SVO あるいは VSO の基本語順を持つ言語の分布と重なる傾向がある。しかしその中にあって、アイヌ語はユーラシア北東部の SOV 言語のひとつとして、語順の点では周辺言語と同じ様相を見せている。

語順と接辞の方向性についての論考としては、Hawkins & Gillian(1988)が挙げられる。同論文では、Stassen, Bybee(Perkins), Gilligan らが集積した複数の言語サンプルの分析に基づいて、最終的に“NP + Po and OV imply the co-occurrence of suffing and not prefixing, and prefixing implies Pr + NP and VO, and not NP + Po and OV”(225)という結論を出している。これに従えば、アイヌ語の OV（かつ NP + Po）という語順と、prefix 優勢という形態論的性

質とは、類型論的に見て例外的な組み合わせであるということになる。

すなわち、アイヌ語は接頭辞優勢という点で、地理的な分布の上でユーラシア北東部における特異点となっているだけでなく、類型論的な観点から見ても、接頭辞優勢でありながらOVという語順を持つという点で特異な言語であるということになる。

この現象を歴史的に説明するにあたっては、印欧語がひとつの参照すべき例となるだろう。Map26とMap81の対比において目につくのは、印欧語が一貫して接尾辞優勢の言語であるにもかかわらず、語順においては多様であり、しかも地理的に西から東へVSO－SVO－SOVという、きれいな分布を見せているということである。これについて、印欧語においては古くからこのような語順の多様性があり、接辞の位置のほうもそれに応じて多様であったのが、後に接尾辞に統一されたとは考えられていない。逆に語順のほうが歴史的に変化したものだというのが、通常の解釈であろう。

一般に、語順のような文法的な関係を示す要素の変化のほうが、接辞の順序のような語の内部における形態論的な要素の変化より容易に起こるという仮定に、大きな異論はないと思われる。そのように考えると、アイヌ語の接頭辞性と語順の「ねじれ」についても、語順のほうが周辺のSOV言語との接触によって変化したと考えるほうが、より可能性が高いことになる。しかし、それだけでは接辞に関する地理的分布の特異性について説明できない。

ここで、Map26を再び参照すると、接頭辞優勢（この場合、Dryerによって4という評価を受けたものを含む）の言語は、日本列島のすぐ南西にある台湾原住民[3]諸語から始まって、フィリピン、インドネシアからニューギニア、オーストラリアにかけて広がり、日本語と接触する形で分布していることがわかる。換言すれば、オーストロネシア諸語をはじめとするそれらの接頭辞優勢の言語とアイヌ語をへだてているのは、日本語ただひとつであり、仮に日本列島に日本語が話されていなかったとすれば、この地域の接頭辞優勢の言語の分布域は、アイヌ語をふくめて連続したものとなるはずであることになる。

したがって、これらの現象についての歴史的な解釈のひとつは、次のようなものになるであろう。

かつて、アイヌ語はオーストロネシア諸語と直接接触するような地理的な位置にあり、それらとひとつの言語領域を形成していた。すなわちその時期には、接頭辞の優勢性と語順において、アイヌ語はそれらの言語と同じ性質を共有していた[4]。後に、アイヌ語とそれらの言語の間に、日本語が割って入る形になり、アイヌ語は（おそらくより北方に押し上げられて）朝鮮語、トゥングース諸語、ニヴフ語など、いわゆる「アルタイ型」の諸言語にとり囲まれるようになった。そして新たにそれらの諸言語と言語領域を形成することによって、比較的変化しやすい語順のほうから、それらと同じOV（かつNP＋Po）型に変化して現在の状態となった。

以上のような仮説を立てることによって、アイヌ語が接頭辞優勢であるということの地

[3] 台湾に先住するオーストロネシア系諸言語については、「原住民」というのが現地での正式の呼称とされているということである（2008年12月8日、於慶應義塾大学、シンポジウム「日本語とその隣人たち」での土田滋氏の説明による）。

[4] その他に、充当（applicative）接辞の存在なども、そこで共有されていた性質のひとつかもしれない。

理的な分布上の特異性と、類型論な特異性を同時に説明することができる。

一方、この仮説の最大の問題点は、いうまでもなくアイヌ語が VO という語順であったという直接的な証拠がないことである。しかし、以下に挙げるいくつかの点は、そのような語順の転換があったことを示す間接的な証拠として考えられるかもしれない[5]。

１）名詞句に主語、目的語を示すマーカーがない：かつて SVO という語順であったと考えれば、主語か目的語かは、V との相対的な語順で示せるので、明示的なマーカーは必要ない。
２）二人称の人称接辞に主格と目的格の区別がないので、特に二人称と三人称の組み合わせになった時に、どちらが主語かは文脈から判断するしかない：これも、かつて SVO であったと考えれば、人称接辞が主格・目的格の別を表示する必要はない。
３）格助詞（後置詞）の大部分が他動詞起源であり、名詞句―格助詞は統語論的にほぼ目的語―他動詞の関係に等しい：VO→OV という語順転換があったとした場合、それと同時に自動的に前置詞→後置詞という転換が可能であり、語順転換の妨げにならない。もちろん、このこと自体はかつて VO であったという仮定となんら直結しないが、Map81 の語順の図と Map51 “Position of Case Affixes”を比較すると明らかなように、case を affix で表示しない言語（日本語もアイヌ語もこのひとつとしてカウントされている）と、VO という語順とは、かなりの程度、分布において似寄りを見せているのであり、アイヌ語のこの格表示の性質が、語順と関連付けられる可能性は考慮する必要があると思われる。

引用文献

Haspelmath, M. et al. eds. (2005) *The World Atlas of Language Structures*. Oxford.
Hawkins, A. and Gilligan, G. (1988) Prefixing and Suffixing Universals in Relation to Basic Word Order. *Lingua* 74.
村崎恭子 (1979)『カラフトアイヌ語―文法篇―』国書刊行会.
Shibatani, M. (1990) *The Languages of Japan*. Cambridge Univ. Press.

[5] この他に、主格―目的格人称接辞の組み合わせにおいて、接頭辞のみの方言と接頭辞－接尾辞を組み合わせる方言とがあり、原型を定め難いということ。またその具体的な組み合わせ方が方言ごとに違うといってよいほどばらばらであることも、語順の転換が起こった後で、人称接辞の再編成が各地域で別個に行われた結果ではないかという可能性がある。

The Degree of Prefixing of Ainu

Hiroshi NAKAGAWA
(Chiba University)

On the Map 26 in Haspelmath, M. et al. eds. (2005), Ainu is valued as an "approximately equal amounts of suffixing and prefixing" language, which is an uncommon trait along with Ket in the northern Eurasia, where "strongly suffixing" languages are predominant. The recalculation of the "affix indexes", however, shows that Ainu has more preference for prefixing to be counted between "predominantly prefixing" and "moderate preference for prefixing", than the one M.Dryer, the author of the map 26, estimated. One of the reasons of this disagreement is probably that Dryer considers Ainu having "plural affixes on nouns" (affix type iv), but, in fact, Ainu can't be regarded as having such affixes.

This trait of prefix predominance can be seen more in the southern area of Eurasia than in the northern area, where Ainu is spoken. Moreover while Ainu has OV and NP + Po order, Hawkins and Gilligan (1988) said that statistically OV order is rarely co-occurs with prefix predominance.

I propose here a diachronic explanation for this discrepancy.

Once Japanese had not been spoken in Japanese archipelago and Ainu had been situated side by side with Austronesian languages, which were VO order and prefix predominance. Ainu had formed a linguistic area with these languages and had the same traits of them. Then Japanese intruded into the islands, between Ainu and the southern languages, so that Ainu was pushed toward north and surrounded by Japanese, Nivkh or Tungusic languages, which were OV order. Then Ainu formed new linguistic area with them and changed its word order into OV, while unchanged on its prefix preference.